



## 「最近の台湾情勢と兩岸関係」

外務省 アジア大洋州局 審議官 垂 秀夫氏

(平成28年4月18日 於日本記者クラブ)



### 歴然と残る本省人 vs. 外省人の「省籍矛盾」

まずはこの20年から30年、台湾で何が起きたのか、を駆け足でご説明し、そうした中に今の台湾があるということをご報告させていただきます。全て外務省の見方ではなく私の個人的見方ですので、そうご理解いただければと思います。基本的には敬称を略させていただきます。

蔣経国総統時代の終盤、1987年7月に38年間に及ぶ戒厳令を解除。その後、蔣経国が亡くなり、後継に李登輝が総統になるあたりからです。蔣経国が亡くなり李登輝が88年にトップになって、1995年には初の総統直接選挙を行う。初代の民選総統になるのですが、李登輝が行ったことは台湾の民主化であり、台湾化、本土化です。民主化といっても結局選挙を行っていくということ。選挙を行うためには多数決で勝たないといけないわけです。

台湾ではいわゆる外省人と本省人という省籍矛盾があります。若くなればなるほど消えると言われながら、今も歴然と残っている。外省人とは蒋介石と一緒に共産党に追われて台湾に逃げてきた人たちでざっと1割強、約15%いるといわれています。残りの85%位が本省人です。本省人の中の客家は「中国のユダヤ人」と言われているように、非常に能力があり、お金儲けも上手ですが、迫害されてきた人達で、この人達は居住区も大体限られ、客家の人や外省人が多いところは北、台北の方と軍港がある高雄などですね。基本的に昔の中国から台湾に来た人たち、これは本省人、福建人です。福建も福州の福建人と南の廈門(アモイ)の福建人では相当違います。南の廈門のいわゆる廈門語は台湾語といわれますが、

これを話す人は大体7割です。

何を申し上げたいかという、省籍矛盾はしっかり歴然と残っているなかで、選挙を行うことによって、やはり選挙民、どこの出身かが非常に関わってくるわけです。李登輝は民主化を進めながら、台湾化を進めていった。

李登輝が総統になった直後、大陸では89年の天安門事件で江沢民が上海から呼ばれて急にトップになります。お互い、政権をほぼ同時期に急に託され、大体92年くらいから力を持ち始め、その92年くらいから、中台接近が始まっているのです。

92年11月、台湾と中国の双方の窓口機関(中国側:海協会、台湾側:海基会)が香港で会って、いわゆる92年コンセンサスに達した。これは李登輝の時代です。翌年には中国の汪道涵、台湾の辜振甫がシンガポールで会談し兩岸対話がスタートした。大陸側は最初は李登輝に非常に期待したと思われま

す。94年に司馬遼太郎との間で対談を行って、これはのちに、「街道をゆく」にまとめられますが、この時、台湾人に生まれた悲哀、という言葉が李登輝が発します。台湾は自分たちの政権を持ったことがない。常に外来政権に統治されてきた。昔はオランダであり日本であり、それから清であると。その後、中国人がきた。一度も台湾人の政権を持ったことがない、それが台湾人に生まれた悲哀だというわけです。

### 台湾海峡危機と李登輝の「二国論」

翌年に総統選挙を控えた95年、台湾海峡危機が起きる。中国が台湾に向けてミサイル演習を行い、アメリカは航空母艦を派遣するといったことで本当に